

談話における漢語系接尾辞「―上^{じょう}」の機能について

秋元美晴

はじめに

拙稿「漢語系接尾辞『―上』について」⁽¹⁾において、「―上」の形態論的分類や接尾辞「―上」と「―的」の相違、また、文・談話レベルでの「―上」の扱いなどについて論じたが、本稿では特に考察の足りなかつた談話レベルの機能及び漠然化させる働きを中心に、「―上」の総合的な分析を試みていく。

1、文法的分類・用法

野村雅昭氏は「接辞性字音語基の性格」⁽²⁾の中で、「―上」を体言型語基とし、「地球上の生物」を例として挙げ、「地球上」のように場所を表す語基に「―上」が結合する場合は、被修飾語との位置関係を示す働きを持つとしている。一方、「―上」が「経済」のような抽象的な概念を表す語基と結合すると、「……ニ関スル」といった意味しか持たなくなり、相言型の語基と近い性質を持つようになるとしている。しかし、先の拙稿の形態論的分類によれば、「土俵上」「本誌上」な

どのように場所を表す語と「―上」が結合する場合は非常に少ない。それよりも、「外見」「便宜」「対抗」「指導」などのように、抽象的な語と結合する場合の方が頻度の上からもはるかに多く、また生産的である。なお、用法に関して言えば、次の例のように、形容詞的用法が最も多い。(以下、傍線筆者)

a 建設現場では、全員ヘルメットをかぶるのが規則ですが、インド人に限っては宗教上の理由からターバンを外せないというので、黙認していました。(『文藝春秋』 八月号 一九九二年 一九七頁)

b 雇用上の男女差別を撤廃せよ。(朝日新聞 一九九二年九月十五日 日刊)

c 源氏物語は、これまでの享受史に明らかかなように物語のストーリー上の展開を楽しむだけでなく、場面、歌、会話、季節感などというように様々な方面から読まれてきた。(『日本語学』 九月号 一九八七年 一二五頁)

ついで頻度の多いのは、d、e、fのような用例である。

d 空襲ははげしさを増すなかで、空家を残して健康な者まで疎開することは防空対策上ゆるされなかったからである。

(塩沢美代子『ひとり暮らしの戦後史』 岩波新書 岩波書店 一九七五年 一一一頁)

e また、陛下のご訪中との関連で、中国側から元首がまだ訪日していないことを指摘する意見も見受けられるが、国際慣行上はこのような議論は必ずしも当を得たものではない。(『文藝春秋』 十月号 一九九二年 一二九頁)

f 法律上も、教諭の任命権は都道府県と政令指定都市の地教委にある。(朝日新聞 一九九二年七月十二日 日刊)

dの「防空対策上」は「ゆるされなかった」を、eの「国際慣行上」は「当を得たものではない」を、fの「法律上」

は「都道府県と政令指定都市の地教委にある」をそれぞれ修飾しており、副詞的に用いられている。また形容詞的用法の a、b、c も「たくさんの絵」「はじめての経験」と同じように副詞の転用法の一つだと考えられることから、「―上」は主に副詞をつくる相言系の接尾辞とした方がよいと思われる。

2、談話^③的分析

2―1 接続詞などの後に来る場合

文頭に接続詞などがあり、その後に「―上」の結合する名詞が来る場合、その名詞は副詞として機能する。

g 謙讓表現には、 \setminus *tuhi-ta* \setminus があるが、これは非主語尊敬と同じで、日本語の「お+動詞+する」にあたる。動作を低めて、聞き手に敬意を表す「いたす」、「まいる」、「おる」のような謙讓表現は存在しない。しかし、指導上は、正しい説明さえ与えれば、さほど問題はないだろう。（『日本語学』 九月号 一九九二年 一三三頁）

h 詳しくは、松田卓也・二間瀬敏史『時間の逆流する世界』といったわかりやすい参考書があるから、それをひもといてもらいたいが、物理学の基本法則は、すべて時間に対称、つまり、時間がどちら向きにながれてもよいことになっているのである。だから、理論上は時間が逆向きの世界は立派に成立し得るのである。（『文藝春秋』 十月号

一九九二年 二七四頁）

g において、「指導上」は「問題はないだろう」を修飾し、h の「理論上」は「成立し得るのである」を修飾している。これらは、一文中にあって副詞としての働きをする l の d、e、f と同様である。

2-2 文頭に来る場合

「―上」と結合する名詞が文頭に来る時、先行文との間には形態論的指標となる語は存在せず、二つの文は無形式で連接していることになる。

i 原子力開発が将来容易でないなら、その穴を何で埋めるのか。反原発派の一部には、火力や太陽光、風力など自然エネルギーで必要な供給は全てまかなえる、という主張がある。試算上はその通りだ。日本に開発可能な水力資源は、合計約三千万キロワットだが、いまのところまだ三分の二しか開発されていない。これだけではもちろん不足だが、太陽光に至っては、単純にエネルギー供給の百倍以上、五百億キロワット分を供給できる、とされている。(『文藝春秋』 四月特別号 一九八九年 一一六頁)

「試算上」の「試算」の内容は、先行文のうち、「火力や太陽光、風力など自然エネルギーで必要な供給は全てまかなえる」であり、「―上」を下接することで副詞として機能することになり、「その通りだ」を修飾している。そして、「試算上はその通りだ」の文は先行文と後続文の間に位置し、文脈の展開をスムーズにしている。

j すでに「佐川」は、今後の政治日程にも大きな影を落とし始めている。秋の政局の大きな節目は、臨時国会、内閣改造・自民党役員人事の二つ。

株の低迷は長期化し、財界を中心に、抜本的な景気対策の一刻も早い実施を願う声は強い。そのためには、臨時国会を早く開いて補正予算を成立させねばならないが、国会が開会されたとしても、当分の間は、「佐川」問題で空転することは必至だ。

「最低、金丸を始め、金をもらったと名前をあげられた議員は、証人喚問要求を野党から突き付けられるのは確実。すでに副総裁辞任を明らかにした金丸に喚問の鈴をつけられる人はいないだろうし、竹下派も抵抗するだろう。下手に開会しても、補正予算どころかまったく国会が動かないといった事態になるのがオチ」（自民党国対関係者）
そんな事態を想定したためだろうか、竹下派内には、臨時国会見送り論もささやかれている。景気対策上、補正を放っておくようなことが政治的に可能かどうかはともかく、すでに「佐川」事件の見極めの関係で、臨時国会の召集時期についての判断は遅れてきた。

宮澤は当初「九月上旬にも」と言っていたのが後退、自民党内には「十月下旬に開ければいい方」という空気が支配的になりつつある。（『文藝春秋』 十月号 一九九二年 一七五頁）

j)において、形式的には「景気対策上」は先行文の「そんな事態を想定したためだろうか、竹下派内には、臨時国会見送り論もささやかれている」と接続している。しかし、内容を考えてみると、先行文では臨時国会について述べているのに対し、「景気対策上、補正を放っておくようなことが政治的に可能かどうかはともかく」までは、先行文の内容とは異なる景気対策について述べられている。ところが、その続きの「すでに「佐川」事件の見極めの関係で、臨時国会の召集時期についての判断は遅れてきた」の部分は、先行文と同じ内容である臨時国会について述べられている。このことから、「景気対策上は……ともかく」という部分は挿入句であり、第二段落の「株の低迷は長期化し、……「佐川」問題で空転することは必至だ」の内容を受け継いでいることがわかる。第四段落のここで「景気対策」という語を繰り返すことにより、臨時国会の開会が景気対策においても重要な意味を持つことを読み手に思い起こさせている。

また、「上」を下接することで、先行文脈の内容を受け継ぎ、同時に先行文と接続させる役割を果たしている。「景気対策上、……遅れてきた」の文においては、「景気対策上」は、「ともかく」という副詞を修飾しつつ、「ともか

く」と結びつくことにより、「補正を放っておくようなことが政治的に可能かどうか」という文を挿入させる機能を担っている。

「景気対策上」は、連文のレベルで見ると、先行文の内容を受け継いでいないように見えるが、文章のレベルで見れば、文脈の流れに沿った話題を展開していることになる。

次のkにおいて、「便宜上」は、「一つは、語は使われているコンテキストによってすべて意味が違っており、……」から、「……」、したがって、語は有限なくつかの意味を持っているという考えである」までの長い先行文に接続しており、また、副詞として機能し、「名づける」を修飾している点で、iの「試算上」とjの「景気対策上」と同様な機能を有していることになる。

k 一つの語が具体的なコンテキストで使われているいろいろな例を較べ合せてみると、場合によって少しずつ意味が違っているようにも見え、また、すべての例を通じて共通した意味が存在しているようにも見え。こういうところから、一つの語と結びつく意味の数について三通りの考え方が出て来る。一つは、語は使われているコンテキストによってすべて意味が違っており、無限の数の意味を有するという考え方（この考え方は結局意味などという恒常的な性質のもの存在を否定し、あるのは「用法」のみという考え方になる）、第二の考え方は、語はそれが使われるすべてのコンテキストにおいて常に一定の唯一の意味を持っており、それがコンテキストによって修正されるにすぎないという考え方、第三に、その中間の考え方で、語の意味はある一連のコンテキストでは別であることもあり、したがって、語は有限なくつかの意味を持っているという考えである。便宜上、第一の考え方を「用法説」、第二のものを「基本的意味説」、第三を「多義説」と名づける。（池上嘉彦「意味の体系と分析」『岩

しかし、「便宜上」はiの「試算上」やjの「景気対策上」と異なる点がある。それは「試算」や「景気対策」という語の内容が具体的であるのに対し、「便宜」は「その場その場に適した処置」という意味であり、抽象的であるからである。それゆえに「便宜」という語は、「―上」のみならず「―的」とも結合し、頻繁に使用されることになる。「便宜上」は先行文、あるいは先行文脈の話題を一時中断し、先行文あるいは先行文脈の内容をまとめ、間に合わせの意味を持った副詞であると同時に、多分に接続詞的な機能をも併せ持っているといえよう。

以上、i、j、kと見てきたように、「―上」のつく語が文頭に来る場合、その語は先行文、あるいは先行文脈の内容を整理するとともに、すぐ前の先行文と接続させる働きがある。また、文頭が「―上」のつく語で始まる文に対しては、副詞として機能していることがわかる。

2-1で見た、接続詞の後に「―上」がつく語が来る場合と比べると、順接・逆接などの意味を表す接続詞がなく、先行文とは無形式で接続している分だけ、「―上」のつく語自身にその意味解釈が要求されることになる。従って、文頭にたつ「―上」がつく語は、文法的意味（接続詞的な意味）と、「―上」と結合する語の意味の二重性を帯びるようになる。その際、語の意味が抽象的であればそれだけ文法的に見て接続詞に近く、語の意味が具体的であれば副詞としての意味が強まるといえよう。この傾向は、「―上」のつく語が文頭や段落頭に来る時に特に顕著だが、一文の中で「―上」のつく語が使われる場合にもあてはまる。これについては、「3、漠然化」で述べることにする。

「―上」のつく語の接続詞としての機能は、いわゆる純粋な接続詞が単なる文法的な意味しか伝えないのに対して、先行文あるいは先行文脈の内容を含むと同時に、そのコンテクストの関係において、接続詞としての意味は変化する。

結局、「―上」がつく語は、先行文、あるいは先行文脈の旧情報^④を含みつつ、後続文の新情報^⑤への導入部としての役割をも演じているといえよう。

2—3段落頭に来る場合

ここでは、段落頭⁽⁶⁾に「—上」のつく語が来る場合を考えてみたい。文と文が接続しているように、結びつきの強弱はあるにしろ、段落と段落もまた接続している。1は五段落からなる文章だが、内容上のまとまりから考え、大きく二つに分けられる。

1 ▼編集部より▼

▽「接続」を特集しました。語・句・文章から段落の接続まで、日本語における接続と接続語の問題を取り上げてみました。

▽国語学上、接続ということは、問題が多いようです。構文論上の機能といえるかどうか、修飾とどう違うか、あるいは接続詞と副詞の関係はどうか、と意見も別れ、議論されているようです。

▽ことばと接続ということを見ると、人間の思考の流れにまで話は行きそうです。ものともとのつながりをつけることは、各人各様になされ、このつながりのつけ方に、その人の個性が表れるのかもしれませんが。

▽その昔は、接続の語句を使わず、単に羅列して伝達していたのかもしれませんが。情報が複雑になり、接続の仕方や語句が発達したのかもしれませんが。接続・接続語句をみることは、人間とことばの歴史をかいまみることにつながるのかもしれませんが。

▽次号より、野口武彦先生のエッセイ「江戸俳諧における言語革命」を数回掲載の予定です。（『日本語学』 九月号 一九八七年 一四八頁）

つまり、今月号のトピックである「接続」のことにについて述べられている第一段落から第四段落までが一つで、次号のことについて述べられている第五段落がもう一つである。

第一段落から第四段落までの各段落で述べられていることを整理してみると、第一段落では、今月号のトピックが日本語における様々な接続と接続語について述べられている。第二段落では、国語学における接続の取り扱いについて、第三段落では、接続の認知言語学的な見方について、そして、第四段落では、接続表現の発達とそれにかかわる人間とことばの歴史についての推測がなされている。第一段落から第四段落まで、接続について様々な角度から述べられている。

第二段落の段落頭で「国語学上」という語が用いられているが、その機能は2―2と同様で三つある。第一は先行段落の内容を整理することであり、第二は先行段落と接続させること、そして第三は、「問題が多いようです」の修飾語としてである。ここでもし、「国語学上」という語の代わりに、「国語学においては」、あるいは「国語学では」という表現が用いられるとしたら、三つの機能のうち、はじめの二つの機能が果たされなくなるであろう。

また、ここで「国語学」という語が使われているのは、先行段落の内容と第二段落自身及び後続の第三・第四段落の内容のすべてを含み得る語として選ばれたためだと思われる。なぜなら、「国語学」という語は、接続、接続語句、認知言語学的なとらえ方、構文論上の機能、あるいは国語学史の上位概念を表す語だからである。そして、ここで「国語学上」という語がなぜ用いられているかと言えば、この第二段落が第一段落から第四段落までの中で、中心的な内容を含んだ段落だからにほかならない。

次のmの「外交上」も同様に考えられよう。これは台湾人で昭和大学教授の黄昭堂氏の「天皇陛下、台湾をお忘れなく」と題する文章である。

m 日本では知らない人が着実にふえているが、日本が最初に植民地にしたのは台湾だった。

日本側の公的資料に拠るだけでも、台湾占領にあたり、三万六千人を殺害している。当時の台湾の人口は二百六
十万人なので、自分の親戚や友人の誰かが犠牲になった計算だ。

天皇陛下のご訪中について、台湾としては複雑な思いがある。中国側は「謝罪の旅」にさせないというが、最終
的にはそうならざるをえない。私としてはうらみつらみをいうわけではないが、謝罪の旅で行くなら、まず台湾へ
行くべきだ。

日本側は「国交がないからだめだ」というが、国家元首が国交のない国を訪問したい例は、七二年のニクソン
米大統領の訪中だ。

外交上、大国の中国を優先していくことは、理解できないわけではない。しかし、中国に行かれた以上は、次は
台湾を訪問していただきたい。台湾を無視するのは、許されない。

台日間は経済的にも密接だし、過去の歴史にもかかわらず、台湾の人たちは親日的だ。こういう国こそ、日本は
仲良くすべきなのに、日本のアジア外交をみると、非難されるとペコペコ頭を下げるが、台湾のように非難しない
ところには頬かぶりする。(『アエラ』 38号 一九九二年 二六頁)

天皇訪中に対しての台湾人としての意見が述べられている。各段落で台湾と日本との関係について様々な角度から述べ
られているが、台湾と日本の関係とは、もちろん外交問題である。第五段落の段落頭で「外交上」という語を使うこと
より、読み手の記憶を整理し、明確化すると同時に、各段落を総括している。すなわち、この文章の中で、黄氏が最も述
べたいことは、天皇訪中に際して、次はぜひ台湾を訪問してほしいということである。この文章の主題が、この第五段落
の「外交上」以下に述べられている。

一方、ここで「外交上」という語を使うことにより、「外交問題から言えば」「外交慣例によれば」などという強い表現

を避けているようにも感じられる。

以上見てきたように、段落頭に「―上」がつく語が来る場合、「―上」と結合する語には、意味上まとまりのあるいくつかの段落の内容を含み得るような語が選ばれる。従って、その段落は中心的内容、つまり、まとめの役割を果たすことになる。

3、漠然化

2―4でも多少触れたが、「―上」には結合する語によって、次のnのようにその語を漠然化する働きがある。

n 竹下派は、金丸氏に、会長ポストに留まるように説得することで一致し、表面上、結束を保っているかのように見える。(『アエラ』 37号 一九九二年 一〇頁)

例えば、次のoの文の「表面」をoのように「表面上」に置き換えると、oの文は不自然になる。

o その石は表面がざらざらしている。

o' その石は表面上がざらざらしている。

これは、「表面」というと、石の外側をなす面そのものを意味するが、「表面上」というと、「表面」のように文字通りの意味では使われず、抽象的な物事の見かけの様子、つまり、外観から受ける印象という意味になるからだと思われる。

次のpの文の「外見上」もnの「表面上」と同様である。

p グーテンベルグも二十年もの歳月をかけて、外見上写本にそっくりの書物を印刷しようとした心かげたのである。(『學燈』 vol. 89 一九九二年 七頁)

次のqとq'を比較してみると、q'が多少不自然に感じられる。

q あの人は外見は弱そうだ。

q' あの人は外見上弱そうだ。

これは「外見」が、外から見た直接の様子を表しているのに対して、「外見上」というと、比喩的なニュアンスがそこに加わるからであろう。pに戻って考えてみると、「外見上」は、その文字通りの意味ではなく、むしろ、抽象的に次に続く「写本にそっくりの書物」にかかり、さらに、ニュアンスとして「……だが」という譲歩の意味をも帯びて来るようになる。ただし、この問題は「上」だけの問題にとどまらず、「上」と結合する語にも関係してくると思われる。研究の必要があると思われる。

次のrにおいて、「事実上」を「事実」に置き換えると、竹下氏が出馬宣言したことが事実になってしまう。

r このパーティーで竹下氏は事実上、自民総裁選への出馬宣言をした。(朝日新聞 一九八九年三月二十六日 日刊)

この記事が書かれた時点では、竹下氏はまだ出馬宣言をしていない。いくら出馬宣言をしたことにかわりがなくても、そ

れが公式発表でない限り、「事実」という語を使うことができず、「事実上」という語を使っているわけである。「事実上」は頻繁に使われる語で、特に、新聞や雑誌の政治面や法律用語にその用例が多く見られる。これは、「事実」という語が百パーセント確実な場合にしか用いることができないのに対して、「事実上」という語は、書き手（話し手）がかなり確実だと判断した場合に用いることができる便利な語だからだと思われる。次に二例挙げておく。

s 訪日延期は事実上、訪日中止とみられている。（『アエラ』 38号 一九九二年 一四頁）

t JOCの「がんばれニッポンキャンペーン」は、広告代理店が事実上、取り仕切っている。（朝日新聞 一九九二年七月十三日 日刊）

このような、「上」の使い方は、次のような例にも見られる。

u これでは、しかし、ゆれと誤用をどこかで明確に区別しておかなければならない理屈で、実際上はかえって面倒なことが多いのではあるまいか。（『日本語学』 八月号 一九八三年 六一頁）

v 受験指導が前期中心の一本勝負型を強めているのと併せ、国立大が当初めざした複数受験制は実際上、空洞化しそうだ。（朝日新聞 一九八九年三月二十六日 日刊）

w PKOへの自衛隊の派遣について「憲法上問題がある」とみている人が五八%にのぼることに、国民の複雑な気持ちを示されている。（朝日新聞 一九九二年七月十四日 日刊）

「実際上」「実質上」「憲法上」は、直接「実際」「実質」「憲法」という語の使用を避け、「上」を下接することにより、

ほかして表現しているものと考えられる。これらは *“hedge”* といわれるものと共通点があり、書き手（話し手）が断定を避け、緩和させるための一つの方法であるといえよう。「―上」のこの機能は、漢語系接尾辞「―的」ほどではないが、頻繁に使われている点からも、かなり重要だと思われる。

ただ、一概に漠然化といっても、そこには程度の差がある。右の「事実上」「實際上」「実質上」「憲法上」を考えてみると、「―上」の結合する四語のうち、「憲法」が最も具体的である。Wにおいても、「憲法上」は「憲法の点から」の意味であり、接続詞的な働きはほとんどなく、副詞として機能している。これに対して、「事実上」は「事実」という語の意味が抽象的なため、より接続詞に近い。例えば、SとTにおいて、「事実上」は「つまり」「すなわち」という換言の意味を表す接続詞に置き換えても、あまり文の意味に変化はない。これは「事実」という語が「―上」を下接することにより漠然化したことを意味している。また、先の「憲法上」と比べる時、漠然化が一層強まっていることがわかる。このことから、「―上」と結合する語の意味が抽象化すればするほど漠然化が強まっていくといえよう。

4、まとめ

本稿では、漢語系接尾辞「―上」の談話レベルの機能及び「―上」と結合する語を漠然化させる働きがあることについて考察した。

書きことばにおいては、先行文（先行文脈）と後続文（後続文脈）との間を明確にするための接続詞が省かれることが多いが、その場合、「―上」のつく語は副詞としての機能のほかに接続詞としての機能を担うことになる。この場合、どちらの機能がまさっているかは、「―上」と結合する語の抽象度の違いによることがわかった。特に、段落頭に「―上」がつく語が来る場合は、その段落が意味上まとまりのある前後のいくつかの段落の中心的な内容を含むことになることがわかった。また、「―上」には結合する語を漠然化させる働きがあるが、その程度は「―上」と結合する語の抽象度に関係す

ることを述べた。

今後の課題としては、「—上」と結合する語（主に名詞）の意味分類をし、その抽象性の度合いを調べること、及び談話における「—上」のつく語に、どの程度の接続詞的な機能があるかを明確にしていくことが必要であると思われる。

注

- (1) 秋元美晴「漢語系接尾辞「—上」について」(『緑岡詞林』第十五号 一九九一年)
- (2) 野村雅昭「接辞性字音語基の性格」(『電子計算機による国語研究IX』国立国語研究所報告61 国立国語研究所 一九七八年)の
一一五頁、一二〇頁参照。
- (3) 本稿でいう「談話」は、『ロングマン応用言語学用語辞典』の「談話」は、パラグラフ、会話、対談などのより大きな言語単位を指す」によった。
- (4)(5) 本稿でいう「旧情報」「新情報」は、『言語学・英語学小辞典』の「進行する具体的な談話の個々の場面において、話し手と聞き手によって共有されている情報、言い換えれば、話し手と聞き手の双方にとって既知である情報を「旧情報」と言い、聞き手にとって未知の情報を「新情報」と言う」によった。
- (6) ここでいう「段落」とは、形式上の段落のことを意味する。
- (7) hedging は“A Dictionary of Stylistics”によった。

hedging : hedge

(1) In discourse analysis and speech act theory hedging is the qualification and toning — down of utterances or statements, so common in speech and writing, by clauses, adverbials, etc. in order to reduce the riskiness of what one says.

example:

Loosely Speaking, a telephone is a piece of furniture.

参考文献

- 市川孝「副用語」(岩波講座『日本語6 文法I』) 岩波書店 一九七六年
- 佐久間まゆみ「接続表現の文脈展開機能」(『日本女子大学紀要文学部』41) 一九九二年
- 長田久男『国語連文論』和泉書院 一九八四年
- 永野賢『文章論総説』朝倉書店 一九八六年
- 野村雅昭「接辞性字音語基の性格」(『電子計算機による国語研究IX』 国立国語研究所報告61) 国立国語研究所 一九七八年
- 安藤貞雄他編『言語学・英語学小事典』北星堂書店 一九九〇年
- J・リチャード他編 山崎真稔他訳『ロングマン応用言語学用語辞典』南雲堂 一九八八年
- Wales, K. "A Dictionary of Stylistics" Longman 一九八九年

用例の出典

雑誌の発行所は以下の通りである。「アエラ」は朝日新聞社、「學燈」は丸善株式会社、「日本語字」は明治書院株式会社、「文藝春秋」は文藝春秋株式会社である。

(付記) 本稿は、一九九二年十月四日に学士会館分館で行われた第四三回表現学会東京例会で口頭発表した内容に加筆修正をしたものである。席上、林巨樹先生、中村明先生はじめ何人かの方々から貴重な御意見を賜わった。ここに厚くお礼を申し上げます。